

情報共有

(5枚非管理格)

5.10 広報部

[印] 謝野

暫定版

NISA班へ プレス対応中心

プラント状況(本店レク) 議事メモ

日時：平成23年10月21日(金) 11:00~11:55

場所：東京電力本館3階大会議室

先方：記者約3名(カメラ15台)

当方：原子力・立地本部

原子力設備管理部

広報部

配布資料：

- ・ 福島第一原子力発電所2号機 原子炉水位計の水張り作業について
- ・ 福島第一原子力発電所2号機 原子炉格納容器ガス管理システム設置工事
- ・ 福島第一原子力発電所 2号機原子炉建屋1~5階 ロボットによる雰囲気線量・温度の測定結果
- ・ 滞留水処理分析結果シート

よりプラント状況、配付資料に関して説明。

質疑：

Q. 滞留水の分析について、キュリオン、サリー共にヨウ素とセシウムのDF値を示しているが、それら以外の核種分析結果はどうなっているのか。

A. 9月20日にサンプリングを実施しており、まもなく結果が出る予定である。結果がわかり次第公表する予定である。

Q. どの核種について結果を公表する予定なのか。

A. セシウム以外の α 、 β 核種などを考えている。

Q. 亡くなられた方の死因と作業または放射線被ばくとの因果関係は。

A. 亡くなられた方は8月から福島第一原子力発電所に勤務しており、8月からの外部被ばく線量の積算値は、2.02mSv。内部被ばく線量は、9月のホールボディカウンターの値で記録レベル未満であった。亡くなられた作業員の被ばく線量は低いことから、当社としては被ばく線量と病気との因果関係はないと考えている。また当社産業医に病気と放射線被ばくの状況を説明し、因果関係を確認したところ、被ばく線量が低いことから一般的に因果関係は考えにくいとの見解を受けている。

一方、亡くなられた方の作業状況は、8月からの作業日数で46日間であり、1日あたりの作業時間は約3時間程度であった。具体的な作業スケジュールとしては午前7時30分から作業を開始し8時30分まで作業をした後1時間程休憩、9時30分~10時30分まで作業をした後1時間30分程休憩、12時~13時まで作業をして1日の作業を終えるというスケジュールであり、一般的に過酷な労働環境とは考えにくいことから作業との因果関係はないと考えている。

Q. 亡くなられた作業員は福島第一原子力発電所で勤務する以前に放射線作業に従事し

ていたのか。

A. 今回が初めてと伺っている。

Q. 亡くなられた方の病気は、被ばくや過労によって発症するものなのか。

A. 因果関係が全くないとは言い難いが、現時点では亡くなられた方の作業時間や被ばく線量から過重労働や放射線被ばくの影響ではないと考えている。

Q. 東電の産業医が病気と作業や被ばくとの因果関係がないと話している根拠は。

A. プライベートに関わることであり、回答は差し控えさせていただく。

Q. お亡くなりになった方の病名の公表について、ご遺族の了解を得たのはいつか。

A. 昨日 (10/20) である。

Q. 公表に関して、了解を得られた理由はわかるのか。

A. 特に詳しいお話は元請け会社から伺っていない。当社としては公表が可能かを確認させて頂いた結果、ご遺族から了解を頂いたもの。

Q. 持病や病気になった理由等は把握しているのか。

A. プライベートなことのため、回答を差し控えさせていただく。

Q. 死亡に関して、作業や放射線との因果関係をご遺族から問われているのか。

A. 現在のところ、そういった話は承っておらず、どういった状況であるかについても、これ以上、ご遺族に対して伺う予定はない。

Q. 後腹膜膿瘍や敗血症性ショックとは、ウイルスや細菌による感染症なのか。

A. 病気についての詳細は把握していない。

Q. 病気と作業との因果関係はないとのことだが、作業中の傷口や作業環境の劣悪さから細菌やウイルスに感染したのではないか。

A. 亡くなられた作業員が作業中に怪我をしたとの報告は受けていない。また1日の作業時間から考えても過重労働とは考えていない。

Q. クインスによる2号機の調査について、5階のオペフロ部の線量が高い原因はわかるか。

A. 以前に原子炉ウエルのシールドプラグから湯気等の発生があり、格納容器から漏洩している気体が原子炉建屋のオペフロ部に堆積、もしくは床や壁等に沈着している可能性があるものと考えている。

Q. 2号機の格納容器ガス管理システムの運転開始は早まる見通しか。

A. 現在、タービン建屋にフィルターや除湿装置、ヒータ等の設置を行っているが、それらの接続作業が今後必要になる。以前、運転開始は年内を目処と説明したが、若干早まる可能性もあると考えている。

Q. 3号機については進捗どうなっているか。

A. 配管接続作業や機材の搬入等がまだのため、時間がかかるものと考えている。

Q. クインスはどのような確認を行ったのか。

A. 今回は可燃性ガス濃度制御系のバルブ付近の雰囲気線量の確認が主な目的であり、主に3階の調査を行った。5階の調査を行ったのは、今後、クインスを用いて建屋内の調査を行うことを見据えた一環である。

Q. クインスが停止した原因と回収する時期の見通しは。

A. はっきりとした停止原因は不明であり、回収時期についても未定である。

Q. 2号機原子炉水位計が回復し水位が計測できるようになることで、原子炉の冷え方や損傷燃料がどのような状態になっているかが把握できるのか。

A. 基準面器に水張りをすることで、原子炉水位計が回復し原子炉の水位がどの程度あるのかを正確に計ることができると考えている。それにより燃料の冷え方の状態がどのようになっているのかについて把握できるのではないかと考えている。また以前炉心損傷の解析をMAAPで実施した際に、現在の水位計が正しい値を示している場合と水がない場合の2ケースを解析しており、実際はどちらのケースに近いのか分かるのではないかと考えている。その結果をもとに炉心の損傷の程度について把握できるのではないかと考えている。

Q. 後腹膜膿瘍や敗血症とは、46日程度で発症するものなのか。

A. プライベートな病気であることから、回答は差し控える。

Q. クインスで撮影した画像で5階に写っているフェンスは事故前から設置されていたのか。

A. 運転中通常フェンスの仕切りがされている。

Q. 保安院が事故時運転手順書を公開することについてどう考えているか。また手順書のマスキング理由や、今回の事故における操作内容と手順書の対比した資料の提出等の報告期日が本日となっているが、いつ頃報告する見込みか。

A. 保安院が事故時運転手順書を公開することについて、当社がコメントを申し上げる予定はない。また報告の見込みについては現在提出の作業を進めており、本日中に提出したいと考えている。

Q. マスキングの分量としては、全体で5割程度とのことだったが、その点に変更はないか。

A. マスキングのボリュームについては変更ない。

Q. クインスを回収する場合、建屋内に人が立ち入ることになるのか。

A. 今後、専門家の意見も交えて検討していく。遠隔による回収が可能であれば、遠隔操作で回収し、それができないようであれば、人が現場に行って回収することになると思う。

Q. 2号機の5階における線量測定は今回が初めてか。

A. 以前にブローアウトパネル部でのダストサンプリング測定を行ったことはあるが、建屋内部の線量測定については今回が初めてである。

Q. クインスの回収作業について専門家と具体的な検討には入っていないという認識でよいか。

A. これから専門家と検討するところ。

Q. クインスとの通信が途絶えたとのことだが、現在クインスはどのような状況なのか。

A. 現時点ではクインスの状況は把握できていない。クインスが3階まで降りてきた際に、ケーブルが可燃性ガス濃度制御系の設備に引っかかり、引っかかりを解消しようとクインスを動作させていたところ通信が途絶え、停止した。

Q. クインスが今回のように原子炉建屋から帰還できなくなったのは初めてか。

A. 以前2号機原子炉建屋地下1階の水位を測定するために入域した際に、階段の踊り場で回りきれず身動きが取れなくなり、引き返してきたことがあったが、現場から引き返せなくなったのは今回が初めて。

Q. サリー単独運転になるのはいつ頃を見込んでいるのか。

A. 当面の間、サリーとキュリオンとの並列運転で運用したいと考えている。現在2号機からプロセス主建屋へ、3号機から雑固体減容処理建屋へ移送をしているが、プロセス主建屋の滞留水はキュリオンで処理をしており、雑固体廃棄物処理建屋の滞留水はサリーで処理している。両建屋の水位の変動が大きくなると滞留水の処理が難しくなることから、両建屋からバランスよく滞留水を吸い上げることで、水位の変動を小さくし円滑に滞留水の処理を進めたいと考えている。

Q. キュリオンをバックアップとして使用することだったが、現時点ではサリーと併用で運転したほうがバランスのよい運用ができるということか。

A. その通り。

Q. 2号機建屋内の線量の調査について、過去に入ったのは2階までか。

A. その通り。

Q. 1号機、3号機については過去にどこまでを見られているのか。

A. 1号機は4階付近まで調査している、3号機については線量が高いため、2階の格納容器スプレイ系のところまでだったと思う。4号機は5階のオペフロ部までのほぼ全域に渡って見られているという状況。

Q. 1～3号機において、ほぼ全階を見られたのは今回が初めてか。

A. 4階については階段室のみであるが、ほぼその通りであると思う。

Q. 2階について、前回の線量の値と比較すると、線量は下がっているように思うが、

その解釈で良いか。

A. 比較できる箇所が少ないが、低下傾向にあると思う。

Q. 低下の原因は何か。半減期によるものか。

A. 基本的に半減期の長いセシウムの影響であり、半減期によるものではなく、原子炉が冷えたことによる影響と考えている。

Q. 各号機の線量分布の違いがあるが、それについての見解は。

A. 比較することは難しいが、3号機は全体的に100 mSv/hを超える比較的高い状態である。また、1、2号機と比較すると、2号機の方が少し高い状態であるが、1号機は南東コーナー等、局所的に高い箇所がある状態。

Q. 2号機の原子炉水位計の水張りについて、作業員の被ばくほどの程度か。

A. 建屋1階の北西部にラックがあり、そこで作業を実施する。雰囲気線量としては最大で24 mSv/hで、当社社員4名で作業予定。計画線量3.6 mSvを考えている。

Q. 2号水位計水張り作業は4名体制で実施するとのことですが、4名が同時に入域するのか、2名毎に入域するのか。

A. 確認する。

Q. 1号機の建屋カバーの進捗状況は。

A. 排気系の確認運転、使用済燃料プールへの注水のための配管接続作業を行っている。来週中には予定通り、竣工予定である。

Q. 格納容器内に落下している燃料の状態について、調査に向けた進捗状況は。

A. 現在検討中であり、時期の見通しは未定。

以上

プラント状況 (本店レク) 議事メモ

日時：平成23年10月21日(金) 18:00~19:45

場所：東京電力本館3階大会議室

先方：記者約20名(カメラ3台)

当方：原子力・立地本部

原子力設備管理部

原子力運営管理部

広報部

配布資料：

- ・ 福島第一原子力発電所の状況
- ・ 福島第一原子力発電所敷地内における空気中の放射性物質の核種分析の結果について(第二百十報)
- ・ 福島第一原子力発電所敷地内における海水中の放射性物質の核種分析の結果について(第二百三報)
- ・ 福島第一原子力発電所取水口付近で採取した海水に含まれる放射性物質の核種分析の結果について(10月20日採取分)
- ・ 集中廃棄物処理施設周辺 サブドレン水核種分析結果
- ・ 東北地方太平洋沖地震後に福島第一原子力発電所の地震計で取得した観測記録の分析について
- ・ 【動画】福島第一原子力発電所1号機非常用復水器
- ・ 【動画】福島第一原子力発電所2号機原子炉建屋内風景

よりプラント状況、配付資料に関して説明。

質疑：

Q. I/Cの現場調査映像の中で聞こえる水が流れるような音は何か。循環注水冷却の音ではないのか。

A. 雨水の浸入はあるものの、現場作業において水が漏れているような状況は確認されていない。今のところ空気が漏れている音ではないかと考えている。また、循環注水冷却についてはルートが異なるので、音の主要因ではないと考えている。

Q. 2A弁や3A弁の開閉状況についての評価は想定通りか。

A. これまで報告している事故報告書等の内容と現場の状況は合致している。I/Cの仕組みとして、原子炉の蒸気を吸い出し、I/Cで減圧冷却して元の原子炉に戻すラインの構成としている。通常は3Aが全閉状態で待機しているが、今回は原子炉圧力が上昇し、I/Cが自動起動し3Aが自動で開き、蒸気が流れることで減圧が始まった。この際、温度低下率が55°C/hを越えたため、A系・B系を停止し、3Aが再度閉まった状況になる。その後、津波が押し寄せI/Cは電源が不安定な中においてA系を使用し、B系を使用していないとの証言があり、2A弁が全開で、2B弁が全閉であるのは想定通りの結果であった。これまで事故報告書で報告している通り、電源が落ちると隔離信

号による弁の全閉信号が出るため、B系を止めてA系を使用していたという現場の状況と合致していると考えている。

Q. B系を開けていれば、水素爆発はなかったと言えるのか。

A. 当時、電源そのものが不安定な状態であったため、A系しか使用できない状況であった可能性はあるが、現時点において確定的な回答は出来ない状況である。

Q. 現場調査を行った6名の作業員の被ばく線量は。

A. 計画線量が12mSv/人であり、最大被ばく線量は9.44mSv、平均で5.38mSvであった。

Q. 作業状況において、一番高い場所の雰囲気線量は。

A. 実際に今回の調査とは関係ない地点であるが、3階の南東コーナーで233mSv/hが計測されている。

Q. I/Cの中には、A系で65%、B系で85%の水が残っていたとのことだが、そもそもこの水位計の値が正しいと判断した根拠は。

A. 明確な根拠がある訳ではない。補給弁の回路表示を確認したところ、A系・B系ともに閉まっていた。補給弁は電動弁ではあるが運転員が水位レベルを見ながら遠隔操作にて開閉する弁である。今回は電源喪失していたため、開閉ができなかった。冷却水については、通常は約80%で水位管理をしている。A系については一時的に蒸気を流したため、減っているのではないかと考えているが、B系が80%より増えた理由については不明である。水位そのものに関しては、現時点では信用できないと考えている。

Q. 水位が信用できないということは、水位計が故障している可能性もあるため、ということか。

A. その通り。

Q. 当時、水位計の指示値は65%および85%を示している中で、津波襲来後、I/Cの操作時に空焚きの可能性を疑った理由は。

A. 本日は外観の点検が終了したことの報告だが、実際、当時の運転員がどのように考えたかは社内の事故調査委員会でも調査しているところ。

Q. I/Cに入る配管は原子炉から1本ずつ入っているのか。

A. 手前から入るものと、奥から入るものの2本に別れている。なお、一部保温材が剥がれているため、本体そのものも損傷しているように見えるが異常はないことを確認している。

Q. D/W内につながる配管に関しては、今回の調査で全体の何%が確認できたと言えるのか。

A. D/W外の部分については、大部分確認できたのではないかと考えている。

Q. I/Cをこの時期に調査した理由は。

A. 1号機のI/Cに関しては地震で損傷したとの見解も多く、なるべく早い段階で現場確認を行いたいと考えていた。線量の高さやがれきの問題で現場に近づけない状況が続いていたが、今回の調査によって、ある程度の結果が得られた。

Q. 線量が高く調査が困難な中、今回調査に踏み切ることができた理由は。

A. 特に大きな理由はないが、I/Cの内部の現状を早く把握したいと考えており、今回調査を実施するに至った。

Q. I/Cの配管は、目視点検の結果、損傷はないということか。

A. I/C本体、配管、弁に損傷は確認されなかった。

Q. 作業員が所持していた線量計が2mSv毎に鳴るとはどういう意味か。

A. アラームの発生を10mSvを目標値とし、1.6の倍数毎に8mSvまで積算で音が鳴るように設定してあった。なお、8mSvに到達した時点で連続音が鳴るように設定している。

Q. I/C本体の保温材が剥がれた原因は爆風によるものか、それとも熱によるものか。

A. 爆風によるものではないかと考えている。保温材本体を隙間無く囲む形で設置しているが、強い力がかかって剥げ落ちたのではないかと考えている。

Q. 4号機における爆発だとする地震波の結果が得られるのに、時間を要した理由は。

A. 地震と水素爆発の差異の分析や観測点Cのデータの波形修正を実施する等の検討に時間を要した。

Q. 時間を要した理由として、分析段階で他の余震の影響があったのか。

A. 他の余震の記録や1、3号機の水素爆発の観測記録との比較に時間を要している。

Q. 4号機における水素爆発は、3月15日の午前6時12分で間違いないか。

A. 波形を考えると、ほぼ間違いないと考える。

Q. それでは2号機における6時頃と言われている衝撃音については、現時点でどのように考えているのか。

A. 今のところ明確なことは分かっていない。これまでは2号機では、3月15日6時頃に圧力抑制室付近で大きな音を確認し、圧力計がダウンスケールしたと話していたが、様々な証言を確認する中で、免震重要棟で大きな衝撃音を確認した時刻と圧力抑制室の圧力が0になった時刻はほぼ同時刻に入ってきていることを確認している。今後、免震重要棟で確認した音については、継続して確認する必要があるが、今回の観測記録を分析した結果により、3月15日午前6時12分頃の衝撃音については4号機の爆発由来であると判断したことになる。

Q. 衝撃音が地震波として現れないこともありうるのか。

A. 可能性はあると思う。圧力抑制室の圧力が0ということも事実としてあるので、何故発生したのかについては今後確認していく必要がある。

Q. 衝撃音を聞いた作業員がどれだけいたのかに関しては、今後どのように調査するのか。

A. 事故調査委員会で調べているところであるが、確定はしていない。

Q. 午後6時25分に3号機を閉じたのは何故か。

A. 依然確認できていない。

Q. I/C弁の操作で電源の容量は大きいのか。

A. 津波の後に直流電源が影響を受け、電源として不安定だった。電源を失うと隔離信号により閉信号が出てしまう。運転員の手動操作が必要になったため、手動にて操作した。

Q. 自動操作は、中央制御室からの操作になるのか。

A. 電源があれば、そういうことになる。

Q. 今回の地震波による結果は、2号機の衝撃音はなかったというように考えられるのか。

A. 6時12分に大きな衝撃音があったことは、4号機の水素爆発による可能性はかなり高い。2号機に関しては、計器の故障、衝撃音を伴わない形で破損したこと等様々な見方がある。

Q. 設備の健全性を確認する動画撮影を行った理由は。また、これまでも作業現場で行っていたのか。

A. 点検に伴う撮影はパトロールに合わせる等様々な箇所で行っている。口頭での連絡より、映像のほうが状況を把握しやすいことがある。I/Cは極めて注目度が高いこともあった。これまでの撮影に関しては、サンプリング作業や水処理設備の水漏れの写真等何種類か公表している。

Q. 4号機の爆発の原因は。

A. 正確な状況はわからなかったが、今回の地震波による結果で3号機から出た水素が4号機に入り込み、3～5階に充満したためと考えている。

Q. 2号機地下付近の衝撃音を聞いたとのことだったが、実際どうだったのか。周辺の線量は上がったのか。

A. 4号機の爆発により、モニタリングポストまで粉塵が届き、線量が上がったことは考えられる。2号機の衝撃音は証言が未確定で、様々な情報が行き違っている。

Q. 4号機の爆発については、3号機からの水素の逆流が原因だとした場合、3、4号機両方を爆発させるだけの水素が必要なのではないか。

A. 炉心解析にて600～700kgの水素が発生していると想定しているが、その後それぞれの号機にどのように分担されたのか、といった評価は実施できていない。

Q. 爆発時に3号機から4号機に水素が回り込んだとすると、爆発後に余った水素が逆流しているという理解でよいのか。

A. 爆発時ではなく、3号機の格納容器ベントを実施した際にベントラインである。非常用ガス処理系および主排気筒手前に4号機との合流点があり、そこに回り込んだものと考えているが、現在評価を実施しているところ。

Q. 当初、4号機の状況は建屋に穴が空いているという報告が最初の報告であったと思うが、その後の目撃証言についての聞き取り状況は。

A. 4号機は爆発の後現場確認を行い、映像等でお示ししている建屋の状況を確認した。

Q. 当時4号機の原子炉建屋の映像が公表されたのは最初の報告から2～3日後だったと思うが、その間の社内での報告状況はどうなっていたのか。

A. 現場を確認した作業員は目視での確認を行い、8m四方の穴がある、といった報告を実施してきたと考えているが、最終的には写真等で損傷の状況を確認したことになる。

Q. 4号機の原子炉建屋の写真の公開に時間がかかった理由は。

A. 当時、現場が混乱していたので遅れたものと思う。

Q. 3月15日午前6時12分の観測記録において、観測点Cのみ記録が他と異なる特徴を示している理由は。

A. 津波の影響により、ノイズが乗りやすい状況であったと思う。1, 3号機についてはP波とS波の区別ができたものの、当該観測記録については明確に区分ができないため、速度変形に変換し、S波の到着時刻を判断したもの。

Q. 観測点A～Eの地震計は今回の震災以前から常設されていたのか。

A. 中越沖地震以降、太平洋側で発生する地震記録を地表面でも測定すべきと考え、平成22年7月より順次設置を進めていたもの。数年計測した後は、2Fに移設して測定を行う予定でいたところ、今回の地震が発生した。

Q. I/Cの3A弁については、午後6時25分に弁を閉めているものの、操作理由は不明とのことだが、これは空焚きの恐れがあったためではないのか。

A. 空焚きについて明確に伝えたことはないと思う。事実としては確認できているが何故そのような対応を実施したのかについては、まだ最終確認が出来ていない。当時は午後6時18分に開操作を行い、蒸気発生を確認し、午後6時25分に3Aを閉めている。その後午後9時30分に開けている。その後は記録が無いという状況。記録はとぎれているが、現場調査を行った結果として3Aが空いており、その状態が維持されていたものと考えている。

Q. 2A弁および3A弁は開いていたとのことだが、電源が無くなると隔離信号により弁は閉まることになると思うが、I/Cはメルトダウン後、電源が無いとすると弁は閉まった状態でないといけないのではないのか。

A. 隔離信号が出た後に弁の開閉操作を実施すると、その後電源喪失した場合に再度隔離信号が出るかどうかについてはシーケンス等を含め確認する。

Q. 2号機の衝撃音に関しては、今後、作業員の証言を確認していく中で、これまでの証言によって爆発がないとした事実が覆る可能性はあるのか。

A. 3月15日の午前6時過ぎの衝撃音については主たる要因は4号機の爆発音ではないかと考えているが、現時点で最終的な判断ができていない状況。

Q. 3月15日6時12分の地震計の観測記録においては2号機の爆発が見られないとのことだが、その前後の時間帯の地震波についても分析しているのか。

A. 分析を実施しており、爆発および余震での波形が明確になっているものはなかった。但し、地震計で捉えられない地震であったか、計器の故障等の可能性については調査することになる。

Q. 今回のような評価結果が出てしまうと、実際に証言した作業員が当時の記憶が曖昧になる中で、証言が覆される可能性も否定出来ないと思うが、偏見や余談が排除できるように調査できるのか。

A. 気をつけないといけない部分と認識している。これまでの証言を慎重に確認することになると思う。

Q. 当時の作業員の証言についてはメモ等で残しているのか。

A. その通り。

Q. 実際に証言をした作業員が、その後曖昧な証言に変わっている、ということもあるのか。

A. 事故調査委員会の調査状況は不明であるが、誰が何を聞いていたのかについて確認していきたい。

Q. I/Cの調査を実施した作業員6名は全て東電社員か。

A. その通り。

Q. 作業員のそれぞれの役割分担は。

A. 3班体制で実施している。4階を調査する班、2階・3階を調査する班、待機する班に分かれており、線量測定やカメラ撮影および目視点検を実施している。

Q. 作業員は全て熟練者なのか。

A. 1Fの1号機の現場をよく知っている作業員が担当している。

Q. 今回公表した画像は調査の際に撮影したものが全て盛り込まれているのか。

A. 原子炉建屋通路等を撮影している箇所もあり、編集作業を実施している。

Q. I/C調査において、動画以外に判明している重要情報や分析を実施していることはあるのか。

A. 今回は I / C の配管、主要弁、本体の確認が主目的であり、その他の設備については目視で通りがかりに確認を実施した限りでは大きな損傷や水が滞留してる箇所は発見されなかった。

Q. I / C の調査を実施した作業員の全員の被ばく線量は。

A. 4 階を調査した作業員は 9.44mSv, 9.35mSv, 2 階と 3 階を調査した作業員 h あ 6.69mSv、6.72mSv、待機しており現場には直接行っていない作業員は 0.04mSv、0.05mSv であった。平均の被ばく線量は 5.38mSv である。

Q. 亡くなった作業員については、発症から J ビレッジに搬送されるまでどのような症状だったのか。

A. ご気分が悪くなったとの訴えがあり、J ビレッジに搬送することに決定した。その際、意識はあったものの自力歩行は出来ない状態であり、J ビレッジに搬送後、医者の判断により救急車により病院へ搬送することになった。

Q. 作業員の内部被ばく線量はいつ測定したのか。

A. 9 月 9 日に測定を実施している。それ以降は実施していない。

Q. 発症当時の白血球の状況等は分からないということか。

A. その通り。

Q. 今後、当時の作業員の状況について詳細に調査する予定はあるのか。

A. プライベートのご病気であり、これ以上調査する予定はない。

Q. 東電がプライベートの病気と判断したのは、医師の判断によるものなのか。

A. 仮に死因に不審な点がある場合には、その際に医者の判断や対応があると考えているが、そのような状況ではないようなので、当社としては作業に起因するものではないと判断している。

Q. 作業員が最初に気分が悪くなった場所はどこか。

A. 協力企業の事務所がある場所であり、J ビレッジから車で 15 分程度のところである。

Q. 本日、原子力安全・保安院に提出予定の事故時運転操作手順書の指示事項については、既に提出したのか。また今後の公表の予定は。

A. 現時点でまだ提出できていない。本日中に提出すべく取り纏めを実施しているところ。公表内容については、公表の有無を含めて現時点で未定。

Q. 3 月 15 日午前 6 時 12 分の観測点 C の観測記録のみ、速度波形に変換して評価した理由は。

A. 津波の影響によるものと考えている。P 波と S 波の到達時刻の判別が困難であったため、速度波形に変換して評価した。

Q. 3月15日のみ偶然判別が出来なくなったのか。

A. 1号機、3号機とも詳細な波形になっているが、全体として傾向は同じではあるが、15日のみP波とS波の区別が出来なかった。

Q. 観測点Cのみ原子炉建屋からの距離が他の観測点と比較して近い場所に設置されているが、その影響はないのか。

A. P波とS波の到着時刻までの幅が小さくなるので区別がしづらい状況にはなるが、3月15日午前6時12分については観測点C以外のみで評価を行っても2号機の場合では距離と到達時刻の相関はとれないので、当該振動は4号機の爆発が由来である可能性が高いと評価している。

以上